一、会話から和歌につづく場合、会話のはじめに、「、をつけ、会話が和歌で終っている時には、」、をつけなかった。また、和歌から会話のはじまる時は、「、をつけないで会話の終りに、」、をつけた。

一、校異には彰考館蔵『篁物語』桝形本及び美濃本を用いた。美濃本は戦災で焼失したため、戦前に今井卓爾博士が書き写されたものを拝借して用いた。

一、底本の原状をとりあげ校異で説明した。

例、ふみのちり本ニカクいふ物たれをかと[四字分空白]いふほどに

一、校異の表記は、前に底本、後に彰考館本とした。

例、文のちり(底本)—文のこと(彰本)　あま(底本)—今(彰本)

一、校異には、濁点をつけなかった。

一、注釈書は、左記のように略号を使用した。

「校注」は『校注篁物語』宮田和一郎著　爾保布迺園刊

「新釈」は『王朝三日記新釈篁物語』宮田和一郎著　健文社

「全集」は現代語訳日本古典文学全集『篁物語』池田弥三郎著　河出書房

「新講」は『新講篁物語』菊田茂男著　秋田大学国文研究室

「全書」は日本古典全書『篁物語』山岸徳平校注　朝日新聞社

「大系」は日本古典文学大系『篁物語』遠藤嘉基校注　岩波書店

「注釈」は「篁物語」注釈のうと(一)、(二)、大森郁之助「解釈」昭和三十九年四月号、五月号。

一、引用本文は、主として日本古典文学大系本（岩波書店）によった。それ以外の本文引用の場合は、語釈にその引用本を明記した。また和歌の引用にあたっては、宛て字を一部改めたものがある。

例、覧—らむ　共—とも

一、注解の末尾にその段落を分担した者の名を明示した。

目　次

口絵

小野篁御影（弘仁寺蔵）……3

書陵部本小野篁集（表紙・一オ）……4

彰考館本（甲本）篁物語（表紙・一オ）……4

彰考館本（乙本）篁物語（一オ）……5

彰考館本（乙本）篁物語（一ウ）……6

彰考館本（乙本）篁物語（末尾）……7

彰考館本（乙本）篁物語（本文末尾・書入）……8

小野篁真蹟写（内閣文庫蔵）……9

篁像考（内閣文庫蔵）……10

注解篇……1

研究篇……79

小野　篁伝……（根本敬三）81

小野氏略系図……104

小野氏系図……105

小野篁年譜……（根本敬三）107

『篁物語』の本文……（津本信博）117

宮内庁書陵部蔵『小野篁集』……117

彰考館蔵『篁物語』……119

京都大学国文研究室蔵「小野篁集」「篁物語」二本……128

国会図書館蔵「小野篁集」……130

後藤丹治氏「篁物語新考」で紹介された一本……131

『篁物語』の成立をめぐって……（津本信博）132

(一)篁物語と宇津保物語……132

一、篁と高藤……132

二、篁と雅材……137

三、篁物語と公任……140

四、角筆及び点図について……142

五、兵衛佐と真菅……143

六、篁と仲純……144

七、師走の月夜—すさまじきもの考—……146

(二)篁物語と和歌……148

一、勅撰集と篁物語の和歌……148

二、篁物語の引用歌……153

三、古今和歌六帖と金玉集の篁歌……155

四、『古今集』真名序と篁……157
㈢篁の学生時代……160
一、学生時代……160
二、亡妹の夢の魂の描写をめぐって……163
—篁物語の附載説話—
三、三の君との結婚……166
篁物語論……(石原昭平)167
㈠主題……168
㈡発想—「古今集」の雑と哀傷—……171
㈢夢と招魂……174
㈣贖罪と純愛—「日本霊異記」との関連—……179
㈤構成・成立・作者……184
篁説話の形成—文人と冥官—……(石原昭平)191
㈠文人……191
㈡冥官……192
㈢天人像……195
小野篁説話と篁物語……(石原昭平)199
㈠中国伝奇と篁物語……199
㈡和邇部と小野氏……201
㈢詩才と激情……202
㈣事実と創作—作者像—……204
『篁物語』研究史……(津本信博)209
小野篁関係遺跡めぐり……221
小野篁関係資料……233
『篁物語』研究文献目録……238
索引……243
あとがき……253

親のいとよくかしづきける人のむすめありけり。女のする才のかぎりしつくして、「今は書読ません」とて、「博士にはむつましからむ人をせん」とて、異腹の子のかみ、大学の衆にてありけり、異腹なればうとくて、「あひ見ず」などありけれど、「知らぬ人よりは」とて、簾越しに几帳たててぞ読ませける。この男いとをかしきさまを見て、すこしなれゆくままに、顔を見え、物語などもして、文のてといふものをとらせたりけるを見れば、かうひちして歌をなむ書きたりける。

校異　さいーさえ　むつかしからむーむつましからん　子のかみたいかくのしうーこの大学のしう　ことはらなれはーことはらなりけれは　木丁ー几帳　ものかたりー物語　ふみー文　ちり本ニカクーてと　いふ物ーいふもの　かうひちーかくひち　哥ー一首

通釈　親が非常に大切に育てている娘がいた。娘は女が身につける教養のすべてを習い尽してしまったので、親は「今度は漢籍を読ませよう」と思って、「先生には親しい人をつけよう」といって、娘とは腹違いの子で、大学の学生であった人を選んだ。その人とは兄妹ではあるが、二人は腹違いだから疎遠で、娘は「会いたくない」などと言ったけれど、親は「知らない人よりはよかろう」といって、(厳重に)簾を隔て、さらに間に几帳をたてて、娘に漢籍を読ませた。この男は、娘のたいそう趣のあるようすを見て、少しずつ親しく馴れてゆくにつれて、顔を見合せ、話などもしてやがて男が漢籍を読むための点図、というものを娘に受けとらせたのを見ると、そこには角筆で歌をしるしてあった。

注解　**親のいとよくかしづきける人のむすめありけり**—親がたいへん大切に育てている娘がいた。かしづくは子供を大事に養育する意。「むかし、をとこありけり。人のむすめのかしづく、いかでこのをとこにものいはむと思ひけり」(『伊勢物語』四十五段)「われ人のかしづく女にもあらず、妻にもあらず」(『宇津保物語』〈古典文庫〉巻三、ただこそ)「しかれど、一所をだにわれらかしづきたてまつるべし」(同、巻十四、国ゆづり下)「(先帝の四の宮を)母后世になくかしづき聞こえ給ふを」(『源氏物語』桐壺)『宇津保物語』の例などにみるように、高い地位にある親が自分の娘